

集落論・コミュニティ論の再検討

岡田秀二（岩大農）・三浦隆博（岩大院農）・岡田久仁子（岩手県立大総合政策）・
佐々木一也（岩大農付属FSC）

課題と背景

集落とコミュニティが今日改めて注目されている。その直接的背景は、農業政策における集落の登場である。中山間地域への直接支払い制度は集落協定を条件にしており、その実施において集落の力が改めて評価される面が少なくないのである。そして米政策改革大綱では、集落営農が生産の担い手として位置づけられた。勿論、零細農切り捨て、という批判への対応にすぎないとか、会社化への過渡的道具立てとの見方がある一方で、地域が地域を守るための下からの対応としての政策実施とみる論者など多様である。

その農政に集落が登場したのは、グローバル化と環境問題への対処からである。集落やコミュニティが改めて注目されるようになった根本のところには実はこの問題がある。時代転換の中での個人や地域のアイデンティティへの探究、帰属に対する欲求が集落やコミュニティと接合するのである。また、環境問題への対処と係わって我々は、持続可能な開発という考え方を受入れているが、その実現に向けては、広義の経済学の現実化、インフォーマル経済の評価、そしてその延長に集落やコミュニティによる地域の自然や生活の再評価と期待が現れているのである。

一方ではしかし依然として続く農山村の疲弊・衰退の象徴としての集落消滅、限界地化する集落への言及も少なくない。

我々もまた如上の関心等から集落へのアプローチを開始したが、集落やコミュニティ研究については、農村社会学や村落社会学、地域社会学等における膨大にして重厚な研究史が存在している。それらを紐解きつつ、実態と理論のバランスある研究を志向しているが、研究史の十全な整理はとうてい成し得るべくもない。

それでも先の関心に加え、森林利用、林業生産、林業経営、林野所有、等のキーワードを重ね、また他方では集落やコミュニティ研究史の大きな展開史整理を前提に、森林・林業・山村及び自然資源分野からの集落・コミュニティ関連研究について若干の検討を行ってみたい。

それは一重に集落やコミュニティが如何なる意味と姿において森林・林業再生主体たり得るのかを明らかにせんがためである。

分析対象と方法

今回とりあげる論稿は、上の問題認識から主に'90年代半ば以降を中心とする。また、紙幅の関係から、ここではとり挙げる論稿の研究グループや著者名を中心に挙げるにとどめざるを得ない。

ひとつは井上真氏や立花敏氏を中心に実施した山林集落分析の成果について。

2つ目は、佐藤宣子氏や興相克久氏などを中心に主に九州の山村集落を扱ったグループの研究である。

3つ目は奥田裕規氏と垂水亜紀氏を中心に行っている山村調査についてである。

これらの外、多少公表時期はさかのぼるものもあるが地域の森林管理や林業生産の主体形成と係わって集落問題にも注目の論稿を草している、船越昭治氏、根津基和氏、笠松浩樹氏外、をとりあげたい。他の研究分野から大野晃氏、嘉田由紀子氏については触れることとなろう。その他集落や村落研究の基本文献についても同様である。

それら論稿のとり挙げ方と整理は、各人のいわば問題のたて方に注目する。それは、問題のたて方の相異は問題とする領域・事柄に影響し、その関係には現代農山村問題・森林林業問題の把握の仕方と打開の方途の認識の違いもからみついていると思われるからである。

（連絡先：岡田秀二 shujisan@iwate-u.ac.jp）